

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.110

京町家通信 第110号 2017年1月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ<http://www.kyomachiya.net/>

巻頭言 ● リセット

あけましておめでとうございます。

みなさまにはお健やかに新年をお迎えになられたこととお慶びもうしあげます。本年も京都の町家再生の活動にご協力を賜りますようお願い致します。

京町家再生研究会は昨年7月17日に活動を始めてから25年という節目を迎えました。平成4年7月17日祇園祭の日に発足以来、四半世紀が経ちました。多くの方々のご支援とご協力を得てこれまでの長きにわたり京都の町家再生の魁としての役割を果たしてきたと自負しております。25年の時間とともに多くの調査記録、図面、報告書を始めとして、ブックレット、京町家通信、ニュースレターとしての京町家通信を出してきました。このたび25年のこれまでを考えるにあたり、京町家通信1号から5号を読み返してみました。

1号は平成7年2月1日発行と記されており、あとがきにはその年1月17日の阪神淡路大震災のことが書かれています。当時の編集担当であった会員の磯野英生氏が西宮北口駅から新神戸駅までを、同じく会員であった布野修司氏とその研究室学生さんと歩かれた様子が記されており、激しい破壊と感じておられたことに加え、これが京都で起こったなら壊滅的な状況になることは明らかであると書かれています。あわせて、京町家の再生を目指す我々は重い課題を背負い込んだとされ、だからこそ我々は進まねばならないとの意思表示をされています。京町家再生研究会のはじまりは震災が大きくかわり、木造の構造が課題となり、京町家の安全と防災は今も継続した大きな課題です。

1号目の特集は橋弁慶山町の会所の再生でしたが、再生の設計を担当された大谷孝彦氏（前理事長）の丁寧な報告が特集として掲載されています。調査研究と実践を掲げた再生研の活動報告1号としての意気込みも感じられる記録です。再生研の祇園祭の会所再生に対する取組と思いは引き継がれ、その後船鉾、八幡山と続き、現在は大船鉾の会所の再生が進んでいます。また、忘れてはならないのが、京町家作事組・情報センターの事務局で、ここは釜座町の町会所として今もなお町内の大切な町家です。

2号は室町の町家再生、3号は土壁の研究、4号はケーキ屋さんセカンドハウス東洞院店、5号は町家調査。それぞれ1年間の出来事と再生研の活動の履歴がでています。毎年繰り返し建築基準法への取組、防災、木構造については議論さ

れており、それは25年を経た今も変わらず続いています。これまでの時間の経過と多くの方々の努力は本当に根付いてきているのか、しっかりと検証することも必要なことです。

京町家通信創刊号（1号）の巻頭に「京町家とその再生」と題された堀江悟郎先生（京都大学建築学教室元教授・京都建築専門学校校長（当時））の文章があります。その一文を紹介して今年の始めの私たちの活動の礎としたいと思います。

…前略… 次に、再生ということについて考えてみよう。一つは建築形式や技術という目に見えるものは社会的環境といったものが対象となるだろう。いずれも「伝統」というキーワードが重きをなす。伝統を守る、とよく言われるけれども伝統とは継承されるものである。伝統というのは時間的経過の各時点における文化の歴史的蓄積を指しており、継承というのは過去に現在を加えて未来に残すことである。前代がそのまま次代に伝えられるのではなく、現代に適応する何物かが加えられ活性化されたものが次代に受けつがれることによって伝統は生き延びる。いま伝統といわれるものに何を加えるべきかが、これを重んじ未来に伝えようとする際の第一の問題点となるのである。…中略…

今さしあたって我々の当面する問題は、なお残存する個々の町家に対して迫りつつある変貌への圧力をどう受けとめどう解決すれば最善であるかという答えを探ることであろうと思う。個々の場合の条件はことごとく異なっており、共通の答えなどはありませんが、その考え方には一本の筋が通っていないと、解答は信条によらず心情による場当たりのものとなってしまう、結局次代に何の価値も残すことはできない。…後略…

25年を迎えた今、この文章は重く、きびしいものです。町家再生という文化の継承を担うものとして、これまで溜まってきた澱をとりはらい、発足当初の「信条」を見直し、活動を進めていきたいと思っています。

＜小島 富佐江（京町家再生研究会理事長）＞

論考 ● 作全協姫路大会と今後に向けて

作事組全国協議会姫路大会が去る10月29,30日に開催された。町家を直して守る各地の活動グループが連携と協働により、法制度などの共通課題を克服することを目標に掲げて、作全協が設立されたのが、2009年2月であった。実はその前年、その旗印のもとに駆けつけた活動グループが集まり、準備会を開催した地が今回の姫路であった。

これまでの大会を概観するためにテーマ、シンポ及び分科会の内容を並べてみる。

【第1回京都】

テーマ：作全協の立上げ

シンポ：町家保全・再生技術の現状と展望

―地域活動と連携に向けて―

分科会：1. 町家の法的適合化への道筋
2. 町家の技の再生、習得、継承
3. 町家の意匠と快適性

【第2回八女】

テーマ：伝統的な建造物の保存継承と地域の建築文化

シンポ：事例報告と全体討議

分科会：1. 町家の法的適合化への現況と課題
2. 町家の技の再生、習得、継承
3. 伝統構法と産地地場住宅への挑戦

【第3回金沢】

シンポ：金沢の事例報告(町家ドミトリープロジェクト、町家流通コーディネート事業、金沢市伝統構法木造建築物耐震性向上マニュアル(町家編)発刊、こどもマイスタースクール)

分科会：①－A 大工＋石工＋瓦＋板金
①－B 畳職人
①－C 左官職人
② 町家の耐震診断と補強

【第4回宮津】

シンポ：宮津町家の概要説明

分科会：1. 各地の町家再生事例の紹介及び再生手法に関する情報交換
2. 町家再生技術の特徴についての情報交換
3. 再生技術についての意見交換会

地域の町家は地域で守るという観点から、大会の内容も地域に任せてきた。その結果、大会は地域の活動の進み具合や市民の認知度及び行政の協力度を反映したものとなった。そこからいくつかの問題点も見えてきた。

ひとつには、当初、各地域での大会が職人集団設立のきっかけになればと考えていたのだが、各地域はその前に克服しなければいけない課題を抱えていた。行政が積極的に伝統工法の職人の育成にかかわる金沢は別として、伝統工法を担える大工や他の職方の不在である。

ふたつには、伝統木構法が建築基準法に絡めとられていて、

一方で伝統木構法と建築基準法の折り合いをつける研究や実験が公表されているなかで、やむを得ないことであるが、立ち位置や改修方法を決めかねている地域もある。

みつつには、改修実践がこれからということで、住み手や一般市民への普及も未だしという地域も多い。

また反省点としては、地域に任せてきた結果、活動が進んでいるところはそれを披歴する場になりがちで、一方これからというところは焦点を絞り込めずといった、いずれも町家を伝統構法で改修する職方の意見交換と交流の場、という趣旨から外れがちなことであった。

そうしたなかで第5回の姫路大会が決まった。姫路は設立準備会が開かれた08年以降、調査研究の成果はあげていたが、改修実践はまだ実績がなかった。大会を活動再開のきっかけにということであった。

問題点や反省を踏まえ、今回は準備段階から意見交換や姫路に出向き、町家の状況を確認しながら、京都と姫路の職方同士の意見交換の場を設けるようにした。その最終の協議の場で姫路から、市民にその存在が殆んど知られていない職人とその語り口を市民に知ってもらうことをテーマにしたいとの提案があり、それを受け、一般市民に職人を通して町家の良さを知ってもらうことを大会の主なテーマにしようということになった。

【第5回姫路】

シンポ：めんめらのいえはわえらが守る

―無口な職人たちが今あえて話すこと―

分科会：1. 職人さん大集合(改修中の町家にて)
2. 隣と仲良くする方法
(隣の工事の影響でもめてる町家にて)
3. 伝統木造で作ろう

主なテーマを果たす場がシンポである。そのためには市民に集まってもらう必要がある。組織的に呼びかける団体がないことから、手立てはマスコミや行政の広報と口コミだけである。結果は一般市民57名の参加を得た。町家再生活動がこれからの状況で、かつ限定的分野であることからすれば上々である。

進行役は町に入り込み、町のつれづれを絵と文でつづる冊子を発行し続け、これまでの自宅の改修で業者に対応に不満を持つ、建築の素人を自任する版画家である。パネラーは姫路周辺―姫路中心部には伝統木造を手掛ける職方はいないとのこと―で伝統木造の新築を手掛ける若手の工務店や大工、それとコメンテーターの荒木さんである。

「伝統木構造の会」に所属する大工たちが淡々と語る伝統木造の話に、初めて聞く一般参加者は戸惑ったかもしれないが、姫路の活動再開の初仕事であるSm邸改修工事の施主夫妻が、改修して残そうとした経緯や改修後の暮らしへの夢を、フロアーから語る姿は一般市民の関心を引き付けたと思う。

今大会の成果は今後の姫路の活動を見守るしかないが、今後の作全協のあり方に方向性を与えた。すなわち大会を地域の活動と市民、行政一例にもれず市長が参加―とを結ぶ場にするということである。

＜梶山 秀一郎（京町家再生研究会幹事）＞

論考 ● 京町家基礎調査に参加して

2016年11月27日、雨の降るなか、京都市主催の京町家基礎調査に係るボランティア調査がおこなわれた。2016年新年号（京町家通信104号）で小島理事長が「町家調査」の復活を初夢にしていたが、さて夢は叶ったのだろうか。

今回の対象は明倫学区、本能学区、有隣学区、当日70名ほどの市民ボランティアが調査員として集まった。いわゆる第3期調査と呼ばれる2008年～2009年に行った調査データをもとに、その後の変化や残存状況を調べるというものである。スマートフォンなどのタブレット端末からデータベースにログインし、対象町家のデータをチェックしながら、変化状況を入力する。地図に書き込まれたIDを打ち込めば対象データが呼び出され、町家の外観が表れる。住宅地図と首っ引きで「これか？」と迷うようなこともなく、簡単に確認できる。学生を中心にスマホ操作が得意な方々が変更事項をその場で入力していく。サクサクと仕事は進み、一チーム30から50軒を順調にこなした。冷たい雨の追い打ちもあり、「こなした」というのが正直な感想である。夢の実現とはほど遠い。

京都市が関わる大規模な京町家調査は4度目になる。事の起りは1995年から1996年のトヨタ財団助成による市民レベルの調査である。とにかく実態を知りたい、住み手の声を聞きたいという意欲が強く、田の字地区を少しずつ回る地道な調査であった。これをもとに京都市景観・まちづくりセンターが主となり、再生研も一部企画・運営に関わったのが1998年の調査であり、あわせて第1期調査と言われている。

このときの座談会「京町家まちづくり調査パネルディスカッション」（特集：京町家の未来像—京町家まちづくり調査に参加して—）が京町家通信第5号に詳しく掲載されている。すでに町家の連担性は失われているが、地域や学区の特性があること、それらの特性を踏まえた調査が望ましいこと、調査の成果がそれぞれの特徴のあるまちづくりに役立つことを期待する、などの意見や感想が述べられている。義務ではなく、調査そのものを楽しむ、そこから生まれる調査の意義、町家のあり方を参加者が共有していることがわかる。第2期調査は一部の追跡調査に終わったが、次の大規模な第3期調査においては、立命館大学が企画に入り、GPSを使った調査となった。元学区の小学校をベースにして、調査へ出か

け、集合場所に戻ってくるとすでにその日のデータは分析中。他のチームの様子も伺いながら結果速報を聞き、みんなで討論する時間があった。

これまでの調査では、迷い、手間を掛けている間のやりとりのなかで、専門家も一般市民も学生も、町家の価値を共有し、これからのことを考えることができた。今回はこのような議論の場もなく、調査終了後、流れ解散となった。2016年6月におこなった京町家新条例のシンポジウムをうけ、現在京都市で議論されている「京町家を壊す前に届け出てもらおう」ための基礎データにもなるらしい。そんな大事な調査をこういう形で終わらせるのはもったいない。

ボランティア参加者に学生が多数見られたのは救いである。若い人たち、町家に興味を持つ人たちにまちの実態を知ってもらいたい、そしていろいろな再生手法があることも共有したい。このような場を通じて、実際に学びながら得ていくものは、何年経っても色あせない。私自身、最初のトヨタ調査のお手伝いに関わったことが再生研と深く関わるきっかけであり、今の活動の原動力になっている。

前述の座談会では、京都市景観・まちづくりセンターの位置づけがわからない、市民活動団体との連携の意義が見えてこない、見えてきた課題に対して再生研は具体的に動いていいのか、その場の相談に応じていいのか、調査時に感じたさまざまな疑問や課題はちゃんと京都市に届くのか、などの問題点も提示された。これらの多くは今も解決されていない。また、京都市が地域住民のまちづくりを推進しながら、今回の調査案内は、地元のまちづくり関係者になかったと聞いている。市民団体、大学、地域住民、学生、京都市の若手職員も含めて、関係者が具体的に関わってこそ、ボランティアで調査をおこなう意義がある。

今回がこれからのプレ調査であることを願う。調査設計を再検討し、専門家と地域住民をまきこみ、バージョンアップした町家調査を2017年にはおこなおう、そしてこれからの町家のあり方について語る場を設けよう。「一年の計は元旦にあり」

＜丹羽 結花（京町家再生研究会事務局）＞

歳時記◎1月の本願寺

平成 25 年 4 月から、西本願寺北隣にある西本願寺門法^{もんぼう}会館地下で、全国からお参りに来られるご門徒さんに食事を提供しています。西本願寺関係者は、西本願寺と言わず、本願寺と言います。(正式には、浄土真宗本願寺派龍谷山本願寺。)全国に多くの祇園祭があるのに、京都祇園祭と言わないのと同じことでしょう。本願寺は、大変特殊な所で 12 月 20 日に、おにぎり 600 人分と、豚汁を作ります。その日は、お煤払い。堀川通りから見える大きな屋根の建物、御影堂、阿弥陀堂の大掃除は 500 年前から続いている行事です。

次の行事は、1 月 4 日お鏡開き、千人分のぜんざい接待です。年配の方が多いので餅は使わず、しらたま入りのぜんざいです。朝 10 時に本願寺を堀川通りから入り、御影堂前のお茶所という場所に行けば、どなた様でも接待が受けられます。1 月、次の大きな行事は、御正忌報恩講法要です。毎年 1 月 9 日から、親鸞聖人のご命日である 16 日まで営まれます。仏教では「食事^{じきじ}」と呼ばれる、午前 10 時から正午までの間に食事をする習わしがあり、このときに出る精進料理を「齋^{とき}」と言います。本願寺では、毎年 1 月 10 日から 15 日まで、お齋を国宝書院の鴻の間で、お一人につき一万円以上の御懇志に対するお扱いとなります。この料理は、堀川高辻にある矢尾治さんが作られています。数年前から全席椅子での食事になりました。浄土真宗では、第八代蓮如上人の頃、自らが育てた野菜や穀物を持ち寄って、お念仏をよろこぶお同行^{どうぎょう}がお寺での聴聞の間に調理し、一品一品こころのこもった料理を分かち合い、箸をすすめたのがお齋の始まりと伝えられています。今日のお齋も蓮如上人の時代からの野菜と汁物のみの調理の伝統にならい、胡麻豆腐・五種の煮しめ・おひたし・お和えと揚げふの盛り合わせ・香の物・味噌仕立ての汁物による一汁五菜を基



1 月 4 日のお鏡開き (お茶所)

本とし、それぞれ朱塗りの飯^{めしわん}・汁^{しるわん}・椿^{つばきざら}皿・二^{にの}の^{わん}・茶^{ちゃ}津^づ・留^る津^つに盛りつけます。またご飯は、全国のご門徒さんよりお供えされた仏飯米を炊いています。

本願寺のお齋献立 (本膳仕様)

<茶津>胡麻豆腐、山葵醤油

<汁^る・津^つ>かぶら、豆腐、白味噌仕立て

<留津>からし和え、六条ふ

<二^{にの}の^{わん}>かぶ、ふき、ゆば

<椿皿>沢庵、紫漬

<飯^{めし}・碗^{わん}>自的

<折り詰め>笹巻まんじゅう、はなふ、れんこん、しいたけ、高野豆腐、かぶの酢漬け、金時豆、ひろうす

高価な食材を使うのではなく、旬の野菜やありふれた乾物を使います。私たちのいのちを支えてくれているのは、魚や肉だけではなく、地中に精一杯根を張って生きている植物を、無駄なく使い切ることが大切です。私たちの生活スタイルは、ものがあふれ、食べものをお金を出せば簡単に手に入れることができます。お齋を通じて、現代人のぜいたくな食事を、見つめなおすきっかけになればいいと思います。

最後に、京町家通信をお読みの皆様には、是非本願寺の書院、飛雲閣を見に行ってください。普段は、非公開ですが、御正忌報恩講法要期間、そして 3 月 7 日から 5 月 31 日の第 25 代専如門主伝灯奉告法要期間、見せて頂けない日もありますので、本願寺参拝教化部へ確認の電話をされてから行かれることをお勧めします。

(075)371-5181 番

<矢尾定 佐々木定寿 (京町家友の会)>



矢尾定の精進料理

報告◎京町家でもてなす 小島邸煎茶会

リオ五輪も過ぎた昨年10月、来たる2020年の東京五輪を見据え、文部科学省を中心とした官民の主催で「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」が開かれた。そのイベントとして、京都と東京で数日間にわたる一連の催しに先駆けて、参加者が京町家で様々な体験をするプログラムが組まれた。会場の一つとなった小島邸では煎茶を楽しむ機会が設けられ、スイスよりIOC国際オリンピック委員会の客人が訪れた。

お茶には楽しみ方が色々ある。濃茶・薄茶のフォーマルな茶席から、茶室に限らず山上での一服まで。今回は広間で輪になって、お喋りも気兼ねなく煎茶をいただく。床の間には、日本にお茶が伝えられた頃の逸話を描いた掛軸と、大きな土瓶にピラカンサとミヤコワスレが生けられている。陶芸家の稲澤隆生氏が自作の道具を使って茶会ごとに設え、配線をカモフラージュする竹は今朝切られてきたもの。リキュールグラスほど小さな茶器が可愛い。最初にいただく玉露は、そもそも飲むというよりも一滴の雫に含まれる旨味を味わうため、拍子抜けするほど量が少ない。各々が席順にトレイから茶器を取り、また同じ順番で戻すと、各々の茶器でお代わりが出来る。次に同じ茶葉を、電熱式の炭がスッポリと収まる白い陶製の涼炉（りょうろ）で焙じると、風味が一変する。さらにまた別の茶葉で淹れられる一杯は、苦味も香りも煎茶らしく、後口がサッパリする。各々庭を眺めながら、なじみのお茶について話がはずむ。呉服商の多い室町界隈では、着物の柄を引き立てるためだろうか、あまり庭に花を植えない。猛暑で傷んだ苔も雨後は青々しく、一同見惚れているとIOC女史曰く「代わりに石が、咲いているのですね」

小さな茶器で何度でも、いつまでも。話すうちに陽も傾き景色も変わり、日常とは違うけれど肩の凝らない豊かな時間を過ごす。これぞ町家に対応出来る季節ならではの場面だと、続きの間からずらりと屏風の飾られた宵山の様子を思い返し、あらためて町家の懐の深さに感心する。反面、時間の経過を意識するほどの空間や静けさといった環境が、都心では消失し続け、これがいかに儚く貴重な体験かと嘆息せざるを得ない。角地以外は妻壁に大きな開口部を設けず、互いの庭を背中合わせに共有するなど、密集地の知恵が詰まった「京都のまちづくり」が尊重されない限り、本当の京町家は「まぼろし」になる。

<露木 理也子（京町家再生研究会）>



改修事例◎空き借家2軒をあわせて住まいとする

中京区 Kt邸

設計：内田康博／施工：（株）熊倉工務店

ここ数年、すっかり恒例となった東京での京町家相談会ですが、京都に移り住みたいという方、京都で事業を起こしたいという方の他、京都の実家を改修してお住まいその他に活用したいという方々も相談に来られ、実際に改修、活用につながる事例がいくつも見られています。これまでも何例か当通信で紹介されていますが、今回ご紹介する事例も東京での相談会がきっかけとなって作事組で改修をお受けすることになりました。

相談者に初めてお会いしたのは平成27年11月21日（土）、『「京町家を活かす」京町家の暮らしを次世代につなぐために』と題して立命館大学東京キャンパスに開催された相談会の会場でした。相談者は関東にお住いですが、京都の実家ではご両親が昔ながらの京町家におすまいとのこと。大きな改修はしないまま、現在のところは特に問題なく生活されていますが、今後、年齢が進むにつれて不自由が増えることが懸念され、本格的に不都合が生じる前に、住みやすく、今よりも暖かい家に改修しておきたいとのことでした。左右両隣の借家も所有されていますが、空き家となったままで、将来的にはその活用も考えたいとのことでした。立地条件は四条通りに近い街中で、売却すれば転居費用に不足はないようにも思われますが、ご両親は住み慣れた地でこれからも住まうことを希望され、相談者を含む子供たちご兄弟一同もご両親の希望を第一とされ、できれば生まれ育った町家群を維持し受け継いでいきたいとのことでした。

お住まいの町家を改修する場合にはいつものことですが、改修前に仮住まいに引っ越し、改修後に再度もとの家に引っ越すことになり、2度の引っ越しは体力的にも精神的にも大きな負担となります。今回は隣に所有される借家が空いていたため、そちらを改修して住まいとすることで引っ越しを1度で済ますこととしました。借家はすこし小さめですが、表借家と路地奥の借家を合わせると1階だけで生活することが可能となり、トンネル路地も家の一部に取り入れることで面積も有効活用できます。

表の家の築年は棟札によると明治36年6月でした。奥の家は不明ですが、そのしばらく後と思われます。土葺きのまま残されていた屋根瓦はすべて葺き替えました。大部分は当初のままの瓦と思われます。雨漏りの痕跡はあちこちにみられましたが、その都度補修され、現時点で漏れているとみられるところはありませんでした。但し、表の家は風呂・トイレ

棟との取り合いの柱の傷みが激しく、それと接続する1階の桁にも蟻害が進んでいたため、柱、桁とも入れ替えました。また、奥の家も同じく風呂棟との取り合いの柱が傷み、鉄骨で補強してありましたが、柱を入れ替えることとしました。そのほか、揚げ前を通常通り行いました。当初から気になっていた柱の傾きについては、相談者も是非、できる限り直してほしいとのこと希望でしたが、隣接する7階建てのビルの基礎コンクリートが床下まで侵入して柱の根元を圧迫し、反対側の屋根は現在のお住まいと接していたため動かさず、結果、ビルに接する柱を垂直に戻すことはできませんでした。それ以外の柱は足元を少し動かすことでほぼ垂直としています。

お引渡しはあと10日程に迫り、工事は最後の仕上げの段階となっています。今回の改修をきっかけとして、所有されるその他の町家群も今後有効に活用されるお手伝いをさせていただければと考えております。

<内田 康博（京町家作事組）>



表の家の縁側の入れ替えた柱と桁



路地を廊下として利用(工事中)

改修事例◎織屋建ての生家をセカンドハウスに

紫野 Fi邸

設計：末川協建築設計事務所／施工：大下工務店

昨年の9月、京町家情報センターの会員であるエステイト信さんから、北区紫野の物件の調査、診断、報告までの依頼があった。作事組の担当者が所有者に直接お会いすることを条件にお引き受けし、翌月、施工担当の大下副理事長と相談と調査に向かった。猪熊通の北大路を上がったところ、間口2間半、奥行き5間半、元2連棟の織屋建て、明治期築造である。依頼者ご夫妻の夫君の生家であり、その父君が西陣織の帯を手織りされていた町家だそうである。

50年ほど前に火袋に床が貼られ、30年ほど前に大屋根は葺き替えが済んでおり、さらに15年ほど前に織場、ハシリ、ダイドコの床はフローリングにされ、合板やクロス貼りの大壁の仕上げにされていた。しかし町家の構造に関する改修は全く行われておらず、健全であった。倒れは北向きにやや大きく1階階高で30mm、不陸は大黒より表側へ順次50mm程度下る。道路よりも建物地盤が20cmほど高く、元の田畑に盛土をして建てられたよう、基礎の不同沈下というよりは、地盤自体の沈下と見受けられた。

丁寧な手描きの現況図を用意されており、実測はそこに寸法を書き込むだけで済んだ。すでに京都市の空き家活用の調査依頼を済まされており、セカンドオピニオンを作事組に求められた次第であった。在来工法に準じた構造改修の必要報告とは全く別に、イガミ突き、上げ前根継による伝統工法の改修で建物の健全化を図れること、屋根は合板下地で葺き替えが済んでいるものの、それが地震に対する町家の変形性能を拘束すること、元連棟であったため切られた母屋の継手に不都合があることをお伝えした。御相談の当日に釜座町の事務局と作事組で改修済の連棟の町家にご夫妻で見学にお越しいただけた。

当初、ゲストハウスの活用や、1階オモテだけの賃借も想定されていたそうだが、東大阪のお住まいとは別に、お友達やお子さんご家族と京都で過ごせるセカンドハウスとしての改修をご希望されていた。1階の奥をワンルームのLDKにして、大きなテーブルでパーティーをしたいと奥様の夢を聞かせて頂いた。そして夫君はできるだけ元の町家に戻したいと。10月いっぱい一案を提示、11月中旬に概算の提示までをお約束した。そしてひとたび信任が頂け、昨年内に設計契約を頂けた。

十分な期間の中、夫君は打合せのたびに手描きのスケッチを用意された。極低温設備設計・施工の専門の技術者であられ、図面に対してもプロ、設計はしごくスムーズに進んだ。当初業務用で提案していたキッチンはお奥様の希望でシステムキッチンになり、ご夫妻は大阪のショールームを何回も訪れて考慮された。3mのメインテーブルは材料から選ぶべく、岐阜の材木市までご足労頂けた。その後引き渡しまでの間、奥様のバイタリティーにはいつも感服、まさに東女と京男のお施主と思う。設計での議論は一点だけ、床のフローリ

ングを新建材でなく、作事組では無垢材にさせて頂きたいとお願いした。

果たして今年の連休明けに工事着工の運びとなった。清め祓いの参加者にはそれぞれ沢山のお赤飯をご用意頂いた。夫君のイニシアチブで緻密な打ち合わせが、はじめは2週間ごと、そのうち毎週と続けられた。電気工事士の資格をお持ち、基本的な電気設備の在り様を竣工までご教示頂いた。現在はマンションに暮らされており、今時の弱电設備にもすこぶる精通しておられた。「取ったらリモコン」「勝手にスイッチ」「ハンディホーム保安灯」「勝手にナイトライト」など、設計時のグランフロントのショールーム見学と合わせ、伝統馬鹿の設計士には今更ながら、時代の先端の設備を教わることが多かった。追加の工事にも責任をもって当たられ、ステンドグラスの新設引戸や水廻り上部の既存建具の再利用目隠しなど、入念なスケッチを何度も頂いた。

工事も終了間際になって、システムキッチン搬入の際、設計の不備が発覚した。現況図作成の際の実測で織場の奥行きを柱1本分(10cm)多く間違えていた。そのため、キッチンが大黒柱通りよりはみだし、階段の登口が狭くなった。28年間の設計業務の中、痛恨の失態である。解体後に実測をしていれば判ることだった。ご容赦頂いたお施主に申し訳ないしか言えない。

施主は京町家ネットはじめ作事組の取組みにも留意されている。町場の大工や各職の親方、設計がそれぞれのマイペースでプロジェクトが進む。その自律的な品質確保のためには、かつての旦那衆のようにFiご夫妻のような施主がもっと必要だと思う。作事組が町家の新築を本気で目指すなら、法の適用除外だけが目標ではないとも伺った。今日の生活に不可欠な、配線や住宅設備の耐用年数は30年足らず、100年以上持たす町家の新築にはそのメンテナンスがプログラムされなければいけない。町家で暮らすには「ある程度の不便を覚悟して」ではなく、「快適に暮らせる設計が求められている」と繰り返された。今回の改修に懲りられず、今後の作事組の改善や進展を見守って頂きたいと祈念します。

<末川 協(京町家作事組副理事長)>



改修後、猪熊通りの外観



改修後、織場をLDKに

報告 ● 東京相談会報告

11月5日（土）、東京の八重洲にある立命館大学東京キャンパスにて、「京町家に暮らす」-京町家の暮らしを次世代につなぐために-と題して、京町家再生セミナー及び京町家相談会を実施しました。

この企画は、京町家再生研究会・京町家作事組・京町家友の会・京町家情報センターから、設計士や大工・不動産業者が関東へ外向き、今回で4年目になります。毎回多くの方に来ていただき、京町家の魅力や京町家での暮らしについてお話しをし、実際に京都への移住や京町家での暮らしを希望されている方からのご相談をお聞きしております。

実際にご相談の中から、京都に物件をお持ちでこの機会に京町家作事組で改修をされ、現在東京と京都を行き来し、京町家での暮らしを始められた方もおられます。また、京町家友の会に入会され、友の会のイベント等に参加され、京町家への興味を高められている方もおられます。その他にも、京都に京町家をお持ちで、活用困られている方もあり、今後どのように活用・保存していくかというご相談もありました。

前回の東京相談会は特に、京町家を活用した宿が世間で騒がれており、関東にお住まいの方も関心が多く、多数の参加者が来られ、相談の内容もほとんどが投資向け・宿泊施設としての利用を希望されている方でした。

京町家の宿も良いのですが、私共の活動としては、京町家の建物もそうですが、京町家での暮らしやそれに伴う文化の継承を目的としております。ですので、今回は、居住または職住一体の希望者を募り、宿泊施設としての活用を目的としている方はお断りをして行いました。

講演会の内容も「町家暮らしのイロハ」と題し、京町家情報センター幹事 京町家専門店 エステイト信 井上信行氏に講演していただき、地元で育ってこられた井上さんならではのご意見・話しで、京都の町がどうやって出来てきたのかという歴史の詰まった話しや京都で暮らす際の注意点や引っ越しの際の挨拶、町内会や消防団などの地域との関わりなど、とても深い、他ではなかなかこんなに京都人としての意見を聞けないであろう話しをはっきりとしていただきました。今回来られていた参加者の若いご夫婦からも、引っ越しの際のどこまで挨拶に行くべきかなど心配な点や子育てについて保育園・幼稚園についてなど、関心も高く質問があがっていました。その後のアンケートでも「思った以上に地域の結びつきが強い」「物件をただ手に入れただけでは元々住んでいる方に失礼にあたると感じた」などのご意見もあり、良い話しをしていただいたのだと改めて感じました。

私自身も九州から京都へ移住した身ではありますが、京都は排他的ではないと感じます。歴史的にも昔から移住者は多くおられた地域でしょうし、実際に京町家に住んだ際も地域の方にはとても歓迎していただき、お世話になりました。今では、マンション暮らしが増え、そこでの関わり方が当たり前になってきていて、町内との関わり方とのギャップが生じているかもしれませんが、町内の中で暮らしていた昔からの当たり前のつきあい方を当たり前に行っていたら、とても歓迎して下さると思います。めんどくさいこともあるかもしれませんが、助けてくれることもたくさんあります。それは、京都だけに関わらず、それぞれの地域にあるもので、本筋は同じでそれを守ることが大切だと思います。京都はコンパクトな町で自然がすぐそばにあり、住んでみると本当に暮らしやすいと思います。

京町家にお住まいをお考えでしたら、こういう地域や暮らしの話しを前もって知っておくことは大切です。特に京町家は、これまで繋がれてきたその京都の、日本の文化をこれから担う一員としての前向きな気持ちを心の隅にちょっと持って暮らしていただきたいと思います。

＜城 幸央（京町家情報センター）＞



●事務局覚え書き

京町家情報センターでは、3月8日を「町家の日」と一般社団法人日本記念日協会にて登録し制定させていただきました。今後、3月8日は「町家の日」として全国にもお呼びかけして、町家に関わる皆さんに認識してもらい、イベントも開催していきたいと考えております。この日は全国にある町家で自由に、町家でイベントや町家についての催しを行っていただき、楽しく広めていけたらと思っています。全国の町家にお住まいの方、町家関係者の皆様、ご協力をお願い致します。また、詳細が決まって参りましたらご案内いたします。

オーナー登録数：延222	
ユーザー登録数：延1588	
物件登録数：延1599	
成約件数：延203	(2016年12月1日現在)